

主 題：罪と私2

聖書箇所：ローマ人への手紙 7章14-17節

私たち信仰者は何度罪との戦いに敗北を帰して来たことでしょうか。何度も罪と戦い、その罪の誘惑に負けてしまったこと…。悲しく、また、残念なことですが、ここにいるすべての信仰者が日々経験していることです。ある人にとってこの繰り返しの敗北は、戦い続ける勇気と希望を奪ってしまっているかもしれません。こんなに戦っても負け続けてしまう、私はもうダメなクリスチャンだ、私は弱すぎる、もうどうしようもないと、そのように戦い続ける勇気を失ってしまっていないでしょうか？パウロは私たちの弱さを知っています。そして、このみことばを通してパウロは私たちに、彼自身も実は私たちと同じように罪との戦いを戦い続けて来たこと、そして、私たちと同じようにその敗北を経験し続けて来たことを語ってくれています。そして、その上で、パウロはどんなに敗北し続けても決して勝利を諦めていなかったこと、それゆえに、彼は戦い続けたことを私たちに教えてくれるのです。

前回、私たちはこの7章の学びを始めました。この偉大な私たちの信仰の先輩であり模範であるパウロの信仰生活から、彼が歩んだその罪との葛藤、また、勝利の生活のその秘訣を私たちもともに学ぼうということで学び始めたのです。今日も私たちは続けてこの大切なみことばを学んで行きます。前回も話したように、この14節から25節までを見ると、三つの区分が見られます。14-17節、18-20節、そして、最後の21-25節までです。その一つ目の学びを始めた訳です。ここにはまず、パウロは自分自身の証を記しています。

☆パウロの証 14-17節

1. 評価：自己評価 14節 — 律法との対照による評価 —

彼はまず、自分自身の評価を記しました。自己評価です。しかも、彼は神の与えてくださった律法と自らを比較して自分に対する評価を下しています。

1) 律法は霊的なもの

- a) 律法は大切なもの b) 律法は聖なるもの c) 律法は霊的なもの

2) 私は霊的ではない

14節「私は罪ある人間であり、売られて罪の奴隷の下にある者です。」

(1) 私は罪ある人間であり

(2) 売られて罪の奴隷の下にある者

この二つの説明のうちの一つを前回見ました。

(1) 私は罪ある人間であり

パウロは「私は罪ある人間であり」と言っています。「私は肉の人である」と言ったのです。

(a) 罪が内住している

つまり、残念ながら、イエス・キリストを信じた後も私のうちに肉が宿っている、罪の欲望が自分の中に今も存在しているとパウロは言うのです。確かに、パウロが教えるように私たちのうちなる人は新しくされました。信仰者は、罪は完全に赦され聖い神の前に立つことが出来る聖い者とされました。聖霊なる神の内住をいただき、天に国籍をもつ者とされました。しかし、同時に、信仰者である私たちのうちに罪が内住する、そのようなからだを擁しているとパウロは言ったのです。そして、彼は私たちに「これが信仰者だ」と教えました。罪との戦いを経験し続ける者です。日々の生活において、神の前に正しいこと、神が喜ばれることをしたいと思っていながら、そうでない自分、この罪との葛藤を経験している者たちがクリスチャンなのだ…。しかし、パウロが教えたように、この戦いはいつまでも続くものではありません。私たちは永遠にこの罪との戦いを経験し続けるのでしょうか？いいえ、これはこの地上に生きていく間だけです。ある人は肉体の死を通して、また、ある人は再臨を通してこの戦いから解放されます。なぜなら、私たちはそのときに新しい栄光のからだをいただき、そのときに私たちは罪を犯す可能性が全くなくなるのです。感謝なときです。罪とはもう完全に決別するのです。ですから、パウロはその日を待望していたのです。また同時に、「罪ある人間、肉の人」と言ったパウロは、自分のうちに罪があることを言いたかっただけではありません。

(b) 自分の信仰の未熟さ

彼自身は自分のことをこのように言い表わします。「私は信仰的に非常に弱い幼稚な存在だ」と。パウロはコリントの教会の信仰者たちのことを「肉に属する人、肉の人」と呼んでいます。パウロは自分のことをそのように呼んだのです。彼は自分自身に関しても「私はまだ信仰において幼い」と言うのです。

確かに、そのことは驚きです。信仰のチャンピオンであったと言っても過言ではないパウロ自身が「私はまだまだ信仰において未熟だ」と言うからです。それは彼自身が自分のことを正しく知っていたからです。そのことを見て来ました。霊的な人は自分のことを知っているゆえに謙虚な人である、これまで自慢できると思って来たことが自慢できないと気付かされた者です。私たちの自慢はただ一つです。このような罪深い者を救ってくださった主イエス・キリストだけです。その方を大いに誇るべきです。その方を大いに感謝すべきです。パウロはそうしていたのです。パウロは私はあの人たちに比べて少しましだとか、この人たちに比べて少しは信仰において成長していると思うなどという思いは全くなかったのです。だからこそ彼は「私は罪人の中で最も罪深い者、罪人のかしらだ。」と言ったのです。

感謝なことに、聖い神を知って行けば、その神によって受け入れられた自分がどんなに汚れているか、そのことに気付かされて行きます。「みことば」という鏡に自分を照らして行くと、そこに見えるのはどうしようもない罪人の姿です。パウロは信仰の成熟とともに、神がご覧になるように自分を見始めて、そして、自分が見えることによってこのような告白をしたのです。自分の罪深さ、そのことを彼はここではっきりと告白するのです。

(2) 売られて罪の奴隷の下にある者

二つ目の説明を見てください。「**売られて罪の下にある者です。**」と言います。この「**売られて**」ということばは奴隷を売るときに使われることばです。奴隷の売買のことです。しかも、この「**下に**」という前置詞も、実は、奴隷に対する主人の権威、力を表わします。ですから、パウロはここで「私はまだこの罪の奴隷です」と言うのです。そうすると確かに、ある人々は「その通り！パウロは自分のことを罪の奴隷と言っているのだから、これは彼が救われる前のことを話している。なぜなら、救われた者たちは罪の奴隷から解放されているのだから。」と言います。確かに、私たちがすでに見て来たように、ローマ6：17-18に「**神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、：18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。**」とある通りです。ですから、罪の奴隷であった者が解放されて義の奴隷となった、神の奴隷となった、それが救われた者だから、7：14で言っているパウロの告白を見るなら、これは救われる前のことであると言うのです。

でも、前回も見たように、これはそのようなことを言っていないです。救われる前のパウロのことをパウロ自身が語っているのではないのです。私たちはそのことはすでに幾つか見て来ましたが、パウロはここで自分のすべてがこれまでと同じように罪の奴隷であるということを言っているではありません。

◎救われていない人の特徴

(a) 聖書のことばを拒んでいる

思い出していただきたいのは、ローマ人への手紙1章18節に、救われていない人々についてパウロがこのように教えていたことです。「**というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。**」、ここでパウロは二つのことを教えています。救われていない人の特徴は「**不義をもって真理をはばんでいる**」と。「**真理をはばんでいる**」とは「神を、神のおことばである聖書のことばを拒んでいる」ということです。神を拒むだけでないのです。神のおことばである聖書を拒むのです。

(b) 正しい道から外れている

「**不義をもって**」とは神の前に「正しい道から外れてしまっている」ということです。ですから、パウロは救われていない人の特徴とは、神を拒み、神のおことばを拒む、しかも、神が喜ばれること、神の前に正しいことなど一切関係なく、自分のやりたいことをやって行く、好きなように生きて行く、そのような者だと言ったのです。

(c) 神に従うよりも自分の考えに従う

また、同じローマ人への手紙1：25には「**それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。**」とあります。ここにもパウロが教えた救われていない人の特徴が記されています。神に従うよりも自分の考えに従って生きる人です。だから間違っているのです。

(d) 神よりも罪を愛する

また、イエスご自身がヨハネの福音書3：19-21に救われていない人に関してこのように言われています。「**そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。：20 悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。：21 しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。**」、その人は「神よりも罪を愛する人」なのです。光である神を憎んでいるのです。神を信じてその神に従うよりも、自分の好きな様に生きて行きたいのです。

(e) 行動を生み出す「心」が汚れている

もう一箇所、皆さんよくご存じのエペソ2：3のみことばです。「**私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。**」、ここにも救われていない人の特徴が描かれています。「**自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない**」、これが救われていない人だと言います。

「肉」について＝前回学びましたが、**「肉」**は神を無視し神に背き、却って、自分自身を愛して自分自身に仕え自分自身を喜ばせ、そして、自らの力に信頼をおいて生きて行くように働く性質のことです。自分の人生から神を追い出そうとするのです。そして、神ではなくて自分の栄光を現わそうとするのです。このような性質を私たち人間は生まれながらにもって生まれて来ている者なのです。内側の腐敗した性質です。自分中心の生活から生まれるすべての欲求に従って歩んで来たのが私たちです。そのことをパウロはここで**「肉と心の望むままを行ない」**と言います。

「心」について＝**「肉」**が汚れていると見て来ました。でも、パウロはここで実は**「心」**も汚れていると言います。**「心」**というのは「考え、知性、理性」です。私たちの行動を生み出して行くところ、司令塔のような部分です。その部分が実は同じように罪によって汚れていると言うのです。そのような状態で私たちは生まれて来たのです。

「望むままを行ない」、「望む」とは「命令」です。つまり、パウロがこのエペソ2：3で言ったことは、私たちは自分の古い性質、罪に汚れた理性、知性、意志が命じるままに生きて来たということです。外側が汚れているだけでない、私たちの内側が汚れているから、そこから出て来る汚れた行動、間違っただけの正しくない生き方を私たちはして来た、これが救われていない人だということです。是非、覚えていただきたいことは、その人の肉だけでない、その人の心までも汚れているということです。どれ程外側の行動を良くしようとしても問題は心なのです。心が問題なのです。心からいろいろなものが出て来るのです。だから、**「生まれながらに御怒りを受けるべき子らでした。」**と言うのです。パウロはⅡテサロニケ2：10、12でこの滅び、さばきに関してこのように言っています。**「10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。…12 それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」**、ここでもパウロは救われていない人の特徴を教えています。ですから、救われていない人の特徴は神を信じないだけでなく、神のおことばを受け入れようとしない、そして、却って彼らは悪を喜び悪に従って行くのです。なぜなら、悪の奴隷、罪の奴隷だからです。

しかし、そのことを頭に置きながら今日のテキストであるローマ人への手紙7章を見ると、ここに記されている人は今見て来た人たちとは違います。どこが違うのでしょうか？前回見たように、この7章に描かれている人物は罪との葛藤を経験している人たちです。罪を愛して罪に喜んで従って行こうとしている救われていない人の特徴はここには見られません。ここに見る人の特徴は、その罪に何とか勝利をしたい、その罪から離れたいということです。パウロはここで救われた者として、自らの経験、信仰者としてのジレンマを語って来たのです。ですから、この後もそのことを記していると考えべきです。

14節の**「売られて罪の下にある者です」**とはパウロが言いたかったことは何でしょう？実は、これは彼自身の心の思いを表わしているのです。このような状態にあることを彼自身が嘆いているのです。というのは、15節から見て行くと、パウロは繰り返し自らの行動を嘆いていることが記されています。罪を犯すことに心を痛めている様子が記されています。彼はこのように言います。「私は善をしたいのに悪を行なっている。私は自分が憎むことを行なっている。」と。つまり、パウロは**「売られて罪の下にある者」**ということばをもって、このような状態にあることが事実だが、私はこのような状態にあることを喜んでいないと言っているのです。ですから、この告白を見るとパウロがいかに罪を憎んでいたか、そのことを見る事が出来るのです。この「罪のとりこになる」ということは「罪を犯すこと」です。みこころに反したことを行なうことです。そして、そのことは神が悲しまれることです。だから、パウロはそのようなことをすることに耐えられなかったのです。パウロは何よりも神の前に喜ばれることをしたいと願っていたからです。

ジョン・マレーという神学者はこの14節のみことばに関してこのような説明をしています。「内住の罪のとりこにされていることを嘆き悲しむことは、聖化されている彼の感受性の必然的反応である。」と。救われているから自分のうちに罪があり、そのとりこにされていることを嘆き悲しむのだと言います。聖くありたいとすれば、私たちは自分の罪深さを見て嘆き悲しむのです。また、ジョン・マレーは続けて言います。「犯している罪のために自分自身を責め、罪のとりこになっていることを悲しんでいる。その状態がここに記されている。」と。確かに、ここに記されているパウロの姿、それは罪を憎み聖さを愛する者の姿です。まさに、信仰において成長を遂げた者の姿です。このわずかなみことばですが、もちろん、このことはこの後も見て行きますが、このパウロの告白を聞いて皆さん考えませんか？パウロは自分の罪深さに対して心を痛めていました。それは恥ずかしいからではなかった、神を悲しませること

に対する憤りです。私たちはそのような歩みをしているのでしょうか？ 嘘も方便だ、そうしなければ世渡りは上手くやっ行って行けない、でも、果たして、それはこの世の中で上手く生きて行けたとしても、神が喜ばれることでしょうか？ 多少の罪なら赦してくださいと思っていないのでしょうか？パウロは主が喜んでくださる人になろうと思いましたが。主が望んでおられる人になろうと思っていました。では、私たちはそのような思いをもって生きていますでしょうか？「主よ、私はあなたが喜んでくださるような人になって行きたい。あなたが望んでおられるような人に私は変えられて行きたい。」と、そんな強い願い、思いをもって生きておられますか？私たちの信仰の先輩であるパウロはそのように生きていたのです。

イエスを信じていない人がおられるなら、罪の生活、それは自分の意志で神に逆らい続けるという選択をすることです。残念ながら、今あなたは自ら進んで神に逆らい続けるということを選択してしまっているのです。よく考えてみてください。あなたの選択は自分から進んで神に逆らおうとする選択です。なぜなら、もしあなたが神に従うということを考えているなら、そのことを願っているのなら、真っ先にこの方を信じ受け入れるでしょうか？しかし、あなたがこの救い主イエス・キリストを信じ受け入れないというのは、あなたが「私はイエスを信じない」という選択をしているからです。ある人はこう言います、「もっと分かってから信じよう」と。そのようなことは、信じたくない者の言い逃れにすぎないのです。もし、イエスを信じていない人がいるなら考えてみてください。これはあなたなのです。神に逆らう選択をし続けているのです。今、私たちがあなたにお勧めすることは、その罪を悔い改めて主イエス・キリストのもとに救いを求めて出て来ることです。

パウロは自分がどんな存在なのか、そのことを正直にここに告白をし、そして、自分に対する正しい評価を下していました。

2. 証言：自己証言 15-16節

ここに彼が為す証言が記されています。彼は自分の心のうちを正直に告白しています。二つのことをここにみます。

1) 罪への憎悪 15節

パウロが罪に対してどんなことを思っていたのか、どのように罪を捉えていたのか？彼はこのように言っています。15節「**私には、自分のしていることがわかりません。**」、この告白はパウロがどれ程罪を憎んでいたのかを明らかにしています。この「**わからない**」ということば、これは自分がやっていることが悪いことか正しいことが分からないと言っているのではないことは明らかです。なぜなら、パウロはこの15節に「**私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。**」と言って、自分がしたいこと、自分がしていることは自分が憎むことであるとよく分かっているからです。自分のしていることに正しい分析を為しているのです。パウロが言う「**自分のしていることがわかりません。**」とはどういう意味でしょう？この「**わかりません**」ということばを辞書で調べると「理解できない、知ることができない」ということです。そこから、神学者トーマス・シュレイナーは「ここで言われていることは、パウロは自分自身の罪深さが理解できない、そのことを言いたかったのだろう。」と言っています。自分がどんなに罪深い者かは分かっていたつもりだったが、自分は思っていたよりももっと罪深い、だから、その自分自身の本当の罪深さは理解できないでいる、とそのことを言わんとしていたのではないかと。確かに、そのように思います。また、クランフィールドという神学者は「このことばは認める、承認するという意味がある。」と言います。つまり、パウロが言いたかったことは、私はこのようなことを承認しない、容赦しないという告白なのだということです。今、皆さんに敢えてこの二つの説明をしているのはどちらとも言えるからです。

パウロがここで「**私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっている**」と言っているこの告白によって、パウロは自分がどれ程罪深い者であるかを告白しているのです。皆さんも信仰者として歩んで来たこれまでの信仰生活を振り返ってみて、先ほどから話しているように、自分が思っていたよりも罪深い者だということに気付いていませんか？いや、気付かされて来ていませんか？時間とともに、本当になぜこんな者が救われたのか、昔もそう思っていたのですが、私たちの神がどんな方であるかが分かれば分かる程、自分が見えて、そして、自分が見えることによって「神さま、どうしてこんな者があなたからこのようなご厚意をいただいているのか私には分かりません。だって私はあまりにも罪深い者ですから。」と言います。ですから、パウロは明らかに自分の罪深さに驚いていたのです。

それだけではありません。彼はこのような罪を放っておこうとしていないのです。彼は自分の弱さ、自分の罪深さを知っていました。でも皆さん、「仕方ない」で終わらなかつたのです。「今まで頑張って罪と戦って何とか勝利しようと思って来たけれどダメでした。もう諦めます。」とはしなかつたのです。パウロは戦い続けて行くのです。パウロはこのような告白をします。Iテサロニケ5：15「**だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの中で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。**」、自分の行動に注意しなさいと言うのです。たとえ、人があなたに悪を働いたとしても、その悪に対して

悪で報いるようなことをしてはならない、あなたは正しいことをしなさいと言うのです。パウロ自身は そのように生きていたのです。「いつも善を行うように務めなさい。」、いつも正しいことをして行きたいと。同じIテサロニケ5：22では「悪はどんな悪でも避けなさい。」と言っています。彼は悪を放っておかなかったのです。その悪から遠ざかろう、離れようとしたのです。

皆さん、私たちがイエス・キリストを信じたときに、ひょっとしたらある人は私と同じように罪を犯さない人間に生まれ変わったと思ったかもしれませんが、しかし、残念ながら、すぐに私たちはある現実遭遇しました。私たちイエス・キリストを信じる者は罪を犯し続けるという現実です。でも、大切なことは、私たちが罪を犯したときにそれをどのように受け止めてどのように正しく対処するかです。私たちに必要なことは、罪を犯してしまったときにその中であってどのように神の栄光を現わす選択をして行くかです。パウロはここで告白をしました。私は「自分の憎むことを行っている」と。そのパウロが「悪はどんな悪でも避けなさい。」、「いつも善を行ないなさい。」と言います。つまり、彼が言いたかったことは、私たちは善を行おうとしても失敗の連続だが、その中であってしっかりとその罪を正しく告白して正しく歩み続けて行きなさい、まだギブアップしてはいけない、戦い続けて生きなさいということです。

ですから、この7：15でパウロが言っていることは彼のすばらしい告白です。「主よ、私はあなたの前に正しいことをしたい。でも、私のしていることはあなたを悲しませることばかりです。どうぞ赦していただきたい。そして、私は変わって行きたい。もっとあなたを喜ばせる者にならなさい。」と。ですから、パウロ自身がこのみことばの中で自分の本当のありのままの姿を告白して、そして「私はこんな罪深い者だけれども、少しでも主を喜ばせる者にならなさい。もっと主を喜ばせる者にならなさい。」という、その葛藤を私たちに告白しているのです。

2) 律法への愛 16節

罪を憎んでいるだけでありません。神の律法を愛している姿がここに出て来ます。16節「もし自分のしたくないことをしているとしたら、律法は良いものであることを認めているわけです。」、信仰が成長すると律法のすばらしさが分かって来るのです。ここで間違っってはならないことは、律法を守り行うことによっては何れも救いを得ることはないということです。神の教えを一生懸命守ろう、それによって救いを得ることが出来るか？出来ません。行ないによっては絶対に救われないのです。しかし、神に喜ばれる歩みを為すためにはこの律法を知ることが不可欠なのです。この16節に「自分のしたくないことをしている」とあります。彼にとってしたくないこととは何だったのでしょうか？神に逆らうこと、罪です。逆に彼がしたかったこととは、神に従い続けて行くことです。そのために、この神の律法は大切なのです。パウロはこの律法に関してもうすでに「それは聖なるものである」、「霊的なものである。」と言いました。彼は律法はすばらしいものであると言ってきたのです。なぜなら、聖なる霊的な神から与えられたものであり、この律法はそのお方が望んでおられること、そのお方のみこころが記されているからです。ですから、私たちがこのように聖書のみことばを学ぶのは、これは神のおことばだからです。神の教え、神の命令です。そして、私たちがそれに従って行くときに、私たちは神に喜ばれる歩みを為して行くのです。ですから、神に喜ばれる生き方をしようと思うなら、聖書をしっかりと見て、聖書の教えに従って行くことしか、そのような歩みを為すことは出来ないのです。

パウロに反対する者たちはパウロの教えを聞いて「パウロは無律法主義を語っているに違いない。もう律法なんてどうでもいい、好きに生きればいいのだ」と言いました。でも、パウロが告白したように、彼は決してそのようなことを教えていたわけではありません。私たち救われた者は好きに生きるのではなく、救ってくださった神を喜ばせるために神の教えに従って行こうとするのです。現実には、その中で失敗の連続ですが、私たちはそのときに神の前にその罪を告白しながら歩み続けて行こうとするのです。

3. 結論 17節

17節「ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。」、パウロはこれまで自分自身の評価を「私は罪深い者だ」と語って来ました。そして、私のうちにはこのような葛藤があると正直に自分自身の告白をして来ました。その結果、彼はこのような結論をここで述べるのです。これらのことから分かったこと、それは「私のうちに罪が住みついているということ、私のうちに罪が住んでいることは間違いのない事実だ」ということであり、彼が告白したことです。信仰者はどの時代にあってもそのことを知っています。例えば、ダビデ王は神が愛した人、神が喜ばれた人です。しかし、そのダビデは大きな罪を犯したときにこのような告白をしています。詩篇51：5「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。」と。彼はすでに救われていました。神を信じて神に従って行きました。しかし、罪を犯したときに彼が告白したことは「私は咎ある者として生まれた。私のうちには罪がある」と言うのです。

今日、私たちが見て来たように、救われていない人と救われている人、どちらも罪をもっているのです。しかし、違うところは何でしょう？救われていない人はその罪を愛し罪の中を歩み続けて行きます。

神に従おうなどとは思わないし、神を喜ばせようなどという思いはないのです。救われた人も残念ながら罪をもっています。しかし、その人は新しく生まれ変わっているゆえに、神を喜ばせることをしたいと思います。生まれ変わっていたダビデ、その彼が「私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。」と言うのです。

ヨハネはIヨハネ1：10でこのような告白をしています。「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。」と。もし、私たちが罪を犯していないと言うなら、私たちは神を嘘つきとするとするのです。私たちが罪を犯していることを知っているだけでない、神もそのことをご存じだと言います。そのことをパウロは告白するのです。救われていながら私のうちには罪が存在すると。

皆さん、この後、パウロ自身が同じように彼の経験していた葛藤を語ります。話はここで終わらないのです。その後パウロは、ではどうすれば私たち信仰者はこの罪に勝利する生活、歩みが出来ののかを教えてください。8章に入るとそのことをパウロは始めるのです。だから、パウロは私たち信仰者が抱えている大きな問題をよく知っていました。私たちの弱さを知っています。その上で、どうすれば私たちはこの罪という厄介な問題に勝利して行くことが出来るのか、そのことを教えてください。大切なことを彼は私たちにこれから教えて行ってくれるのです。私たちは期待しながらみことばを見たいし、あなたが是非このみことばをしっかりと読まれて、ここで主が言われていることをお考えになることです。

最後に、このようなことを思ったことはありませんか？「神はどうして私が信じ救われたときに罪から完全に解放してくださらなかったのか？」ということです。イエスを信じたときに罪から完全に解放され、罪を犯さない者に生まれ変わっていたらどんなに楽かと思ったことはありませんか？皆さん。なぜ、イエスを信じて罪赦されていながら、この地上の歩みにおいていつも罪との戦いをしながら、そして、敗北を帰しながら歩み続けて行くのでしょうか？なぜ、神はこのようなことを良しとされたのでしょうか？そのように思ったことはありませんか？結論を言えば、これが主の栄光が現わされる最善の方法だからです。神はそのように選択されたのです。私たち人間が思うことは、私たちが罪を犯さない人間になれば、もっともっと神の栄光が現わされるのではないか？なぜなら、私たちは信仰者としてこの地上を生きて行くとき失敗の連続だからです。クリスチャン同士の間だけでなく、未信者に対しても私たちはいろいろな失敗をするのです。しなくてもいいことをしてしまったり、言わなくてもいいことを言ってしまった、私たちの態度も、様々な面で私たちは失敗をしています。

でも皆さん、この罪との戦いを通して、あなたがその罪と正しく向き合って正しく解決することによって、神の栄光が現わされて行くのです。そして同時に、日々の生活において、私たち信仰者は自分の罪深さを神によって気付かされて行くのです。どうしようもない罪人だということに私たちは気付いています。また、これからも神は私たちに気付かせてくださるでしょう。その時に私たちは心からこの神に対して言うこと、それは「神さま、こんな罪深い私を救ってくださって感謝します。人間的には私よりもはるかに優れた人があふれているのに、こんな罪深い私をこんなにも愛して、このようなすばらしい救いをくださったことを感謝します。」ということです。そうして、私たちはこの方のすばらしさを証するのです。人間的に言えば、罪から解放されて信仰者として生まれ変わったらどんなに楽なことでしょう。でも、神はその道を選択されなかったのです。この罪との葛藤を通して神の栄光が現わされて行く、だから、私たちは戦い続けるのです。だから、その罪と正しく向き合って、その罪に対して神の助けをいただいて勝利するように、私たち信仰者は生きて行くのです。

どうぞ、そのことを思いながらこの一週間を歩んでください。罪を正しく解決することです。そして、勇気を失うことなく失望することなく、主のみことばに従い続けて行くことです。「主よ、私を変え続けてください。なぜなら、私はもっとあなたの栄光を現わしたいから」と、そのように私たちの愛するパウロは生きたのです。そして、当然、神はそのように生きることをあなたにも期待しておられるのです。